亜爾然丁時報

文藝附録

第六卷

第四十三号

Año VI. Nº XLIII

リョベット船長

ブラスコ・イバーニエス作
樺 竈 譯

ありとあらゆる冒険の伴つた四十年間の海上生活の後、「事業」から引退したリョベット船長は力べはヤール村に於て最も富の荷力家であつた。

それは熱い太陽に焼けた広くつて真直い道路に一階建ての白塗の家の並んだ例へば亜米利加の小村と云はれ相別小村であつた。

ヴァレンシア市から避暑に来た人達は、戸口先きに日蔽ひをした縞キャンバスの天幕の下で大きな安楽椅子に坐つて居るあの老船長を物珍らしげに眺めるのであつた。彼は過去の四十年間を甲板に於て南や濤のしぶきにあたりながら露天に暮して来たので濕気が骨の中までも浸み込んでひどいリューマチスに悩み始んど終日安楽椅子に腰掛けた儘身動きをしないで過ごした。そして彼は立ち上る度に苦痛を訴へて怒鳴つた。脊が高く筋骨逞しく太つた下腹が両脚の上に垂れかゝり陽にやけた赤銅色の顔は丁寧に剃られて居る老船長は休暇で戸口の前に坐つて居る静かなお人好しの牧師さんのやうであつた。偶し彼のぎつと堅つた命令的な眼差し、人を支配する事に慣れた男のあの灰色の眼だけはさすがにリョベット船長の評判と彼の名前を風る陰惨な物語りを明白に表示して居た。

彼は亜米利加のギネアの海岸からアンティーサマス島へ運送して行く黒奴を満載した彼の有名な大型帆船で英国巡洋艦の追求から巧に逃れ乍ら断え間ぶき英国海軍との闘争の内に生涯を過ごしたのであつた。勇敢で徹底的に沈着な彼は断じて水夫達に躊躇するなど、云ふことを見せなかつた。

人々は彼に関してあらゆる惨虐な事を物語るのであつた。巡洋艦の追求から逃れるために自分の船に満載した黒奴を海に投り込んだ話。太平洋の難が怖ろしい尾で波濤を立て乍ら大群をなして集り、海の上に絶望的に手を振り動かして居る奴隷を鮫で引き裂き乍ら海を血で染めること。

或ひは乗組員の暴動の際に彼が独りでピストルを乱射し、斧を振り廻し乍ら鎮めた話。或ひは彼が怒の爆発した場合には恰も猛獣の如く甲板の上をあはれまわつたこと。また彼が航海に連れて行つた或る女を嫉妬からの紛争の挙句船橋から海の中に投り込んで終つたなど、云ふ事までも人々の語るところであつた。また同時に彼は非常に気前がよくつて、水夫達の家族を扶けるためには何物をも惜しまなかつた。彼は一度怒るや自分の子供でも殺しかねふかつた。偶し誰が海の中へ落ち込むやうな際は猛悪な海鳥をも怖れずに立所に水の中に飛び込んで救助するのであつた。また黒奴の買取人が例へ二三ペセータでも彼を瞞しでもしやうものなら彼は気狂の様に怒つた。そして彼はその晩ハバナ市で既に有名になつて居た大盡騒ぎに三四千ドクーロの大金を消費するのであつた。船員達は彼を評して「彼は話す先きにひつぱたく」と云つてゐた。それから大洋を航海中に二等運轉士が彼に反逆を謀んだと云ふ嫌疑から短銃で彼の頭蓋骨を打ち抜いて了つた。

仕料そ晩美と黒者船彼彼村い
殘居、斯はそれの関双双共にはの限斯
危馬た一度持ずうの親商が招一度彼と幹待特
でやんふのつたち巡と人の達差しふ
あもう汎船てめに洋しのつたら巡に洋しやつた船艇てを
るあ海でり取ヨリスピットて船了美船美れて了
同かのジプシーに容見で事あつた海岸
時にやうに自分様さ船の人達が
寛に容見で事あつた海岸
時にやうに自分様さ船の人達が
血せと古場の
血せと流す
こ

尚昔で呼で対と惨殺居、仕料そ晩美と黒者船彼彼村い
昔で呼ん居しも危馬でやんふのつたち巡と人の斡待特
彼はくの血とあもう汎船てめに洋しのつたら巡に洋しやつた船艇てを
中血とある海でり取ヨリスピットて船了美船美れて了
血と流すこ同かのジプシーに容見で事あつた海岸
に一向に容見で事あつた海岸
時にやうに自分様さ船の人達が

美女禮讃

美都三

女の話題にのぼせれば、誰れでも先づ第一にその美醜を問題にする。これが女を論ずる正道であるらしい。從つて女性美にもいろ〳〵ふ種類が出来てくる。顔に就いて云ふならば、道具建てが全部一分のすきもなく整つて「アヽ、綺麗だ！」と一言で讃め上げてしまうもの、部分的の美しさに引かれて「フン……大した顔じやないが、あの目が素敵だ！」とか「とても素晴しい！」と、丁半ばくちの樣に目がり氣にされるもの、「美しいつてわけじやないが、何となく感じのいい、顔だねえ」と、所謂綜合美術の部類に屬すべきもの……等々。それに身体の肥えたの、脊せたの、足の格好のよいの、悪いのふんてのが加はるんだから、いやはや複雜極まるものにぶつちまふ。

しかも、その好みたるや時代の推移と共に段々移つて行くのだから尚更やつこしい。わたしの「美女禮讃」も次の時代には――いや〳〵もう既に今時の若い方々には「醜女禮讃」にぶつてゐるかもしれない。

（嘘！悲しい哉！！）

柳腰――俗に云ふ肺病型美人のもてはやされたのは德川時代の事。「ひと抱え あれが柳か 柳哉」の歌きは最早現代に於ては必要を認めない。寧ろひと抱えも、ふた抱えもあるスポーツウーマンの方をどれだけ現代人は讃美することか……。（さうじやありませんかネ）。

処で、此の國の女、即ちアルヘンティーナはどうかといふと、かね〳〵わたしが力説（？）してゐる如く、美しい事は美しいが、それは時代遅れの美しさ、魂の抜けた美しさではふがらうかと思ふ。

実際、それは十八世紀ロココ時代の美形に過ぎず、歎くとも、うゞ才のアンテナが縱横に張り廻され、地下鉄が蜘蛛の巣――とまで行かぶくつても、二三本並んで走らうといふ現代のブエノスには、どうも相應しくないようです。

処で、どうして「美しい事は美しいが……」ふんて「が」の字がつくのといふと、あんまり顔の道具が整ひ過ぎてるからなんだ。

一体人間といふ奴は「萬全」とか「十二分」とか云つて、いつも完全、或ひは完全以上のものを求めて進んで行く。それを「理想」と称して、そこに進歩があり、発達があるんだ――といふと、まるで倫理の講釈みたひになつてしまひそうだけれど、その癖「ものは八分目」とか「完全は行き詰まる」ふんかんと兎に角不完全さを喜ぶ矛盾さを一向平気で持合はせてる。だからこそ、アルヘンティーナの同じ鑄型に入れてポン〳〵と叩き出した樣ふ――所謂「美しい事は美しいが……」の蹟細工、死面ふんが、段々馴れるに從つて、嫌やにぶつちまうんだらう。「味がねエや」「型過ぎらア」ふんてパンパンツルし女を批評する樣ふ歎も、そこに原因するやうだ。

しかしながら、何んふのが美しいか――とふると、話はいよ〳〵面倒にふつて来るが、マア有名無名の美女を挙げて先ツ端から顔の造作をバラ〳〵にほごして見やう。然し一言お断りして置きたいのは、「美の標準は絶対的のものに非ずして、相対性のものなり」と、アインシュタインが云つたが、どうか兎に角、わたし一個人の見解であつて、決して代表的ふものではない――かもしれないといふ事だ。

同感の士があれば幸甚、たとへ非同感の士があつた処「文責無筆者」としが云ふ。

先づ、造作の第一番に接吻に縁のある「口」から初めますが、どうも此の頃の樣に矢鱈と口唇を塗られたんじやア、どうも本来の形を観賞すべく非常に不便を感じて困る。

こんふ厄介ふ事が、いつの時代から初まつたかといふ、敢て現代のモガ諸嬢が発見したものではなく、遠く埃及

現代に於ては生命の色に於て美と同じ色の色彩を保持し現風の美を保持し行はれて居たのだ。

一体色彩は古代日本に於て美しく用ひられたのだ。

日本人は色彩に対する美感は古代に於て美しく用ひられたのだ。

色彩は

輝く句あり——寸分の違ひもなく、ぴったりと嵌まり合ふ——ものすごい美しさ——ぞくぞくするほどの美しさ——ぞくぞくするほどの美しさ——ぞくぞくするほどの

と眼もだんだん長くなる程長くて沈黙の中にあつて何とも云へぬ幻想的な感じを与へる物凄い程美しい眼の美しさが一寸の人数と結婚した後一人で巴里に行つて・アーム夫人の口から初めて聞いたのは十年前に欧洲に行つて・アーム夫人の口からだつたのが最初であつた。

夫人の話によると彼女の美しさは僅か一年の間にメルバと共に欧洲の舞台を踏んでゐる。

そこで初舞台を踏んだ時は「ルチア」と上演した時は「ルチア」の役を演じた時は「ルチア」の役を演じた時は「ルチア」の役を演じた

短歌

折々の歌　　みのる

今一度祖国の土を踏みたしと
月にかこちし吾れにてありしも。

帰りたしと思ふ心をあざ笑ふ
祖国はわれを勘当せしに。

世界のはてをば流れ歩るきて
われ大いふる愛を知り泣く。

月に向ひて口笛吹けば
泣きたくなりぬさすらひの身は。

人々はなぜ乞食と嫌ふかや
ともに語らば泣かざる、彼ふるに

人並みにやさしの心持つ吾れを
壮士とか呼びて人のおそる。

こゝろよき仕事よわれアマゾンの
旅に出で、死ぬむと思ふ

寂しけれど軽き心にふりぬ
わが人生の終らんとするこのごろ

再びサンパウロの町を見むとも希はず
されど会ひたしと思ふ人の三四人あり。

その壮園万里の友につけなむと
ペンとればふとかなしくなりぬ。

心よきつかれふり一日山に入りて斧ふれば
五月蠅さこの思はぬともせで。

労働はキリストよりも有難し
考へることのあまりにも寂しき世ふれば。

真白きダリアが毒ふれば
一輪たべて死ぬむと思ふ。

声たて、そと父を呼びて見たり
ひとり旅ふる真山路にて。

さすらひの旅に上りて早や五年
年賀の文の絶えしそさびしき。

野良犬は寂しがるらむ慰ぶべき
宿のなくして彷徨へるは。

われこの世に不要となりて
ながく長き日をさまざまに悩めり。

短刀をそと頬にふれて見たり
不復讐A氏をにくみし夕べ。

カバレーの帰りに死んでよと云はれ
慰めてよと云はれ迷ひしわれふり。

友を一人ほしいと思へり　そは水差を
とるだにものうき日なりけり。

外国にふしてわれ思ふやう
わがぶきがらを誰が捨つふる。

白塗のコンクリート壁のつめたさに
一輪の花をほしと思へり。